

# 内面形成としてのブッククラブ

— 工学院大学ブッククラブの読書活動を例に —

小 田 玲 子

## Meaning-Making Process Seen From a Book Club Experience

— On Site Views on Kogakuin University Book Club —

ODA Reiko

### Abstract

In this brief article, I have explained the background of the book club experiences at the Kogakuin University. There has been an increasing need among the Japanese literacy experts that “deep learning” is not only a subject-specific matter but also a literacy matter. Japanese education is said to be strong on the subject-specific areas; it is weak in the literacy area.

The Kogakuin Book Club is a small attempt to address the “deep reading” as a form of “deep learning.” Though it sounds a lofty goal, our monthly club meetings have been informal ones where participants are able to listen to what others think and what they think themselves.

One of the originalities of this article is that I have tried to put the “deep reading” ideas on the format of our monthly meetings. When and why does a book club discussion steer the way toward the deep reading? This question, I believe, has rarely been discussed. Deep reading is closely related to “meaning-making” which is often connected to the “vital path” among the literacy scholars. I have discussed pioneering views by Maryanne Wolf (the author of *Proust and the Squid : The Story and Science of the Reading Brain*).

These four-year experiences of the Kogakuin Book Club have shown both the invisible problems of a book club management and also the validity of “speaking out their own ideas” which happens as a result of the “deep dive reading” (M. Wolf).

## はじめに

大学教育の一環としての「ブッククラブ」の歴史は、それほど長くはない。日本の教育現場でのブッククラブは、小学校から高校までの段階での、部活としての読書クラブが主流であり、その世界での活動実態については、すでに多くの実践が出版されている。そのようななかで、筆者自身は、大学・一般の読書活動について活動事例を執筆してきた<sup>1</sup>。

一方、社会人を対象とした読書活動は、日本の場合、子どものPTA活動などを機に集まった主婦たちがその後も継続してきた読書会（メンバーの高齢化がグループの課題になっているとも言われる）、または、企業人による実利的な目標のもとでの「勉強会」であることが多い。

初等中等教育と一般社会人の勉強会という両者の実践例はおびただしい数に上るのに比べて、なぜか「大学生のためのブッククラブ」は、その存在すら明らかではない。本稿は、筆者が2014年に学内サークルとして立ち上げた「工学院大学ブッククラブ」の活動を振り返りながら、現時点での「ブッククラブ」という実践の意味づけをするものである。

“deep talk (深い話し合い)”と“larger conversation (視野の広がり)”<sup>2</sup>を要諦にしたブッククラブは、そこに参加する個々人の生活、また、人生のタペストリーを織り進める。ほかの人のさまざまな見方が“触媒”となって、自分自身の内面という織物の縦糸と横糸が複雑に紡ぎ出され、織り込まれていく営みであることが見えてこよう。

## 1. 「大学生対象」のブッククラブの誕生

「工学院大学ブッククラブ」の立ち上げに貢献してくれた2016年度卒業生のR.O.さんは、次のように述べる。

ブッククラブでの良かった経験は主に2つある。

1つ目に、新書や海外の作家の小説を読むことができる。また、月に1回しか行わないぶん、忙しい学生生活の中でもその選書をじっくりと読むことができる。

2つ目に、選書に対する意見交換である。学外からもお客様を招き、様々な年齢の方々とお話する機会があった。一冊の本だけでもいろいろな考え方があり、その人のお話を聞くことで自分にはない考え方に毎回とても感心していた。

### 1-1 リテラシー観の転換

ブッククラブ文化が熟していない日本の読書文化においては、大学の学生は、一種のエアポケットに陥っているのではないか。単に、「学生たちが本を読まなくなったのはスマートフォンの影響だ」という程度のコメンテーター的な見方にはくみできない。

筆者は、スマートフォンの流布とは異なる次元で「本離れ」が起こっていると見ている。日本の教育課程のなかでの、特に国語の授業では、小説やエッセイの扱い方が非常に形式化されている<sup>3</sup>。そのため、児童生徒たちは早い時期に「本」の内容へのある種の仮面对応に慣れてしまうのではないか。言い方を換えれば、子どもたち、生徒たちは、早い時期に、教師の好むことを発言する習性がついてしまう。同時に、児童生徒は“本音”を言うことの危険さを早い時期に察知しているのであろう。

このことについては、学術的な研究がほとんどない。筆者としては、現在 20 代、30 代のさまざまなタイプの学校の学生たちに聞き取りを行ったうえでの見解にすぎない。児童生徒たちは、自分の発言が教師によって値踏みされることを敏感に感じ取っている<sup>4</sup>。

大学生の間での本離れの根底に、このような国語授業での児童生徒たちの「仮面発言」への思いが残っているとした場合、「読書は、しよせんは、他者（教師）に自分を認めさせるための活動である」という思いが沈潜している可能性がある。つまり、日本の教育風土には、読書のような「正解のない問い（答えのない問い）」への無理解があり、その風土のなかで児童生徒は模範的な答えを享受する。自由な読みを保障するブッククラブ文化は根づきようがない。

さらに、欧米のようなブッククラブが根づかない理由として、宗教的背景<sup>5</sup>を含む文化の違いがある。「自分とは何か（Who I am）」は、古代ギリシアから始まる西欧文化における最古の問いであるが、模索には時間がかかる。聖書に起源を持つ問いでもある。欧米の読書、ブッククラブの背景の一つが「Who I am」という問いを介して内面に向かうという軸は、日本には馴染まない。自分の内面を語らない、他人の内面を見ようとしないことが成熟の証なのか。日本の若者たち（大人たち）は、少なくとも筆者が見聞した範囲では、自分の意見を表に出したとらない。吟味のある人生（ソクラテス）には「Who I am」という大きな問いが伴うはずだが、その経験が空洞になっている。

上記の、日本に固有の二つの読書観「読みに正解を求める学校読書」「Who I am を吟味する哲学の不在」を結ぶ線上には、リテラシー観の狭さに関係している。

リテラシーとは何か。日本の教育界では、「読み、書きできること」つまり 3R's（読み、書き、算盤）技術のことを指す。

一方、リテラシー教育政策の研究者レックスフォード・G. ブラウン(Rexford G. Brown)は次のように定義している<sup>6</sup>。

リテラシーとは、まず、意味づけをし、ほかの人とそれをやり取りすることである。それは単に、先行する年代の作品や考えを理解するのに役立つスキルというのではなく、今ここで、個人や集団が自らの人生を形作りそして未来を企図することによって意味を創造する方法なのである。(Brown 1991 : 35)

続く文章で、ブラウンは、教育学者のデニー・パーマー・ウルフ (Denny Palmer Wolf) から直接聞いたリテラシー観を紹介している。

リテラシーとは、単に私たちが知っていることを記録する道具というものではなく、知識の全領域を把握して、知っている事柄のなかに良さを確証して価値を与えることなのである。(Brown 1991 : 35)

つまり、「リテラシー」とは、紡ぎ出された新鮮な知識のようなものである。または、知っていることのなかの「何が重要なのか」、価値の比重を与えること、つまり、「これが重要なことである」ということが理解できることなのである。

ブラウンが引用しているデニー・ウルフだが、筆者は、1990年代後半にアメリカで知り合いになった。当時、ハーバード大学のPACE (Projects in Active Cultural Engagement) という団体の研究員をされていたデニー・ウルフは、ポートフォリオ評価<sup>7</sup>について注目されていたが、多彩な人である。

多彩な研究のなかに、高校生対象の読書活動のユニークさがある。デニー・ウルフは、アメリカの教育界において、読みの「触媒」を理論化・実践化した人として知られる。

デニー・ウルフによると、内面の触媒は個人個人によって著しく異なる。ゆえに、デニー・ウルフは、perception change (内面変化) のプロセスを「触媒」を基に描き出すという手法を考案する。のちに、この方法は「ポートフォリオ」という呼び名で全米に広がった。

日本の読書文化における仮面的な側面を危惧する筆者としては、この独自性に魅了され、のちに工学院大学ブッククラブを設立するヒントになるのである。

## 1-2 多様性の創出

名門リベラルアーツ・カレッジの一つであるミネソタ州にあるカールト大学の教育学科のデボラ・アップルマンが、2000年代から、地元ミネアポリスとセントポールの2つの高校で実践している「朝食ブッククラブ」がある<sup>8</sup>。

アップルマンにはカールトン・カレッジで一度お会いしたことがある。このかたの専門は「高校生と読書」である。年代層を限定した読書研究はめずらしい。もともと、セントポール市で高校の教員を務めていたこともあり、アメリカの高校生の読書実態に精通することとなり、のちに、多くの教室および課外活動としてのブッククラブに参加し、分析を深めてきている。

アップルマンの研究から学ぶことはいくつかある。その一つは、高校生が、教師の目を気にせずにディスカッションする課外活動としてブッククラブを設定することである。「読み」について、教科内では仮面对応になりやすいのはアメリカでも同様である。教科枠を取り払うことで、「読み」は活性化する。

もう一つは、従来、本を読まないとされる高校生たちだが、その実態は一樣ではなく、例えば、選書次第では、男子生徒もかなりの割合で参加するようになる。ブッククラブは、日本でも同じであるが、圧倒的に女性参加者が多い。

社会学者のエリザベス・ロングは、アメリカ女性の読書グループを19世紀にさかのぼって跡づけ、現代でも盛んな女性読書グループを、テキサス州ヒューストンのブッククラブを念入りに調査して特徴づける<sup>9</sup>。

読書グループは、生に多くの空隙と複雑さと矛盾を抱えた女性を援助しうる文化的形態となってきた。現在の形では、読書グループはナルシシスト的に自己言及的ではないが、現代世界の最も重要な主観的かつ客観的展開について、本——フィクションとノンフィクションの両方——を通して学ぶことにかかわる内省のためのフォーラムを提供しうる。その生が地図のない領土の不確かさをともなっている女性のためには、グループは同じような仲間とディスカッションするという慰めを提供できる。このディスカッションはしばしば本の中の生と他の人びとの生き方——集まっている人の、あるいはグループのだれかが知っている人の——を混ぜあわせる。この種の考えにふけることは、似ているという安心感と、違っているという挑戦と、思いがけない可能性を提供しうる。そして、もしメンバーが満足するものであればグループは何十年も続く傾向があるので、愛する本と仲間とともに女性たちに人生の転機を乗り越える機会を提供するのである。(ロング 2003 : 92)

女性読書グループは、「女性が参加するかもしれない多数の他の支持グループあるいは政治グループ」とは「本と思想に中心的焦点を当てている」点で「突出した違い」があるとする。

その第一の使命は、19世紀初頭の文芸クラブ運動におけるように今日も読書とテキストの楽しみ、そして本と人生経験の両方を考える会話を中心とする。読書グループは今でも中産階級女性の自己修養、個人的なやりがい、個人的なアイデンティティ探究の務めを果たしているが、とくに文学的想像に携わる自己の成長のための時間、そして考えや意味や価値を同じように熱心な仲間とのディスカッションに捧げる時間として役立っている。(ロング 2003 : 93)<sup>10</sup>

「触媒」について次節で述べるが、女性たちは、自分の「生」「アイデンティティ」を、さまざまな人とのインターコースを「触媒」として内省化していることがわかる。女性のみの心性であるとは言えないかもしれないが、自身の後悔や悲しみなどの感情を他者と対照しながら考えていく主観的な生の歩み方は、女性のほうが強いと、筆者は出会ってきた女性た

ち、特に、さまざまな経験を経て看護職を強い意志で選んでいく20代から40代の女性学生たちの生き様から理解している。

工学院大学ブッククラブの例会の常連となってくれている二人の女性は、次のように語っている。

同じ本を読んでいるはずが、それぞれの世代、経験、性別、時代、仕事、様々な背景からでる意見は、自分の想像を遥かに超えていきました。(R. C. 30代女性、教育関係職)

一冊の本を媒介として、各自の記憶や思索が外に引き出されていく過程は、まるで化学反応のようです。胸の内や頭の隅にいつもあるが言葉にならない何かを、誰かが思いがけず代弁してくれたり。その場で自問自答しながら、思いを少しずつ言葉にしていったり。場合によっては聞き役に回って、皆からさらに意見を募って語り合いを深めたり。世代や人生経験による価値観や感受性の違いを共有できるのも大きな利点です。一人一人の心に種を蒔くような時間を提供する場として、非常に有効だと感じています。(A. F. 30代女性、図書館司書)

初期から副代表を務めてくれたK. A.さんは次のように述べる。

ブッククラブを通しての最大の経験は「異なる思考との遭遇」だと考える。年齢、性別、職業などが異なるメンバーで同じ本について意見交換をすると、まったく同じ意見に出会うことはなかった。

こういった個人個人の思考の差は当たり前と言えそうだが、日常のなかで、簡単に触れられるものではない。一つの場合で、一冊の本を共有するという「異なる思考との遭遇」は思考の柔軟さを生み、大変興味深い経験となった。(K. A.)

ロングが跡づけた女性のみのブッククラブも、アップルマンの、高校生たち、特に男子生徒が世の中を見る視野を広くしていくブッククラブも有意義であるが、メンバーの多様性が欠けている。上記の3名のコメントにもあるように、世代、性別、異分野の職業などの多様性は、より、読みのぶつかり合いを起こしてくれる。

工学院大学ブッククラブの例会への常連の一人、80代の元鉄道エンジニアの男性は、次のように語る。

大学のBook Clubの若い人と一緒に同じ本を読んでいる。その本のテーマを踏



まえて、その本の著者と Book Club のメンバーと深い思考を伴った対話をしていると考えている。(J. Y. 80 代男性)

ブッククラブの有意義さは、前半の話し合いがあって、お茶とお菓子をいただきながら後半に入るところに飛び出す“本音”の話し合いにある。J. Y. さんが加わってくださることによって、ブッククラブメンバーの学部生、大学院生は、本の内容から派生した、職業としてのエンジニア、組織論、リーダーシップなど多くを学ぶ。そして、80 代の方をして「学生たちの意見から多くを学ぶ」と言わしめる。

昨年度、サークル長を務めてくれた S. T. さんは、J. Y. さんから多くを学んだ一人だろう。

ブッククラブの経験を通して、みんなで同じ本を読み、議論をして、より本について理解を深めていくという活動から、自分の視野が広がり、より自分の考えを成長させていける経験を得ることが出来ました。(S. T.)

メンバーの多様性が、“deep talk (深い話し合い)”と“larger conversation (視野の広がり)”を可能にする。多様性が、デニー・ウルフの造語である“学びの鼓動”に参加する一人ひとりにもたらすのである。

## 2. 「触媒」論

### 2-1 内面変化 perception change が起こるとき

デニー・ウルフがアメリカの国語教育の世界で評価されたのは、読みの「触媒」理論を広範囲な文学作品を基に実践していったことにある。デニー・ウルフから頂いた資料の中に、ヘルマン・ヘッセ作『シッダルタ』の読みの実践<sup>11</sup>がある。この有名な作品を基に、高校生は、自分の内面変化 (perception change) を具体的に経験することが求められる。認識の根本的な変化を perception change (内面変化) と言う。物事の認識構造が根本的に新しくなることであり、これこそが学びの醍醐味である。

日本的な感覚での読書では、ヘッセのこのようないわゆる名作を、生徒自らの「触媒」として使いこなすことには抵抗があるだろう。名作は、味わうことが目的であり、自らの perception change (内面変化) のために使うことには慣れていない。自分の内面は自分で探し、自分で構築するという、アメリカの教育界の主流の方法ではあるが、「触媒」についてのウルフ氏の考えは、やはり傾聴すべきであろう。

「本 (作品) = 触媒」論を、筆者たちのブッククラブの参加者がことさらに意識する必要はまったくない。しかし、実際には、「触媒」による perception change (内面変化) は、一人ひとりに個別の様相で起こっている。

ある時、かなりの本読みであるため、学部を卒業したての女性に「選書」を頼んだ。彼女が選んだのは、「ブッククラブで皆で読むならば、これしか思いつかなかった」という『旅する木』（星野道夫）である。ブッククラブ会合後、彼女は次のように語っている。

題材の本の著者に対して否定的な意見を持つ方がいました。その本は私がとても気に入っていたものだったため、当然、最初は戸惑い、少しの反発も覚えました。ですが、よく考えてみると、その方の意見は筋が通っており、何か間違えている訳ではありません。その点に気づくと、素直に自分の考えも見直してみようと思えました。別の考えに触れることで、自分の嗜好や意見、立場等を自覚することができたのだと思います。(M. S.)

M. S. さんのなかで perception change（内面変化）が起こっている。ブッククラブの根底に「触媒」の理論を置くことは有意味であろう。

## 2-2 「心の底荷」を知る

小説家になる極意をメモワールで披露している小説家ペネロプ・ライブリー (Penelop Lively) は、次のように述べている<sup>12</sup>。

本は、心の底荷 (ballast：安定させるもの) である。自分をつくる底荷でもある。本ははかない生命しかないが、心から消えることはない。内容は忘れてしまうかもしれないが、心に痕跡が残る。(Lively 2013：195)

青少年時代の独自の心的風景に着目したい。自分の心はどのように形成されてきたのか、自分は何を好み、何を避けるのか。その起源は何か。自分は何に一貫して関心を持つのか。このような内的な問いは、青年期の時代に強く表出する。

前述したように、小学校、中学校、高校とほぼ一貫して、「本を読むこと」すなわち「教師の顔色をうかがうこと」のように同義であった。深いレベルでの認識変化のための材料がないのである。つねに、遠くに置かれている答えに向かって器用に接近するだけである。

深いレベルでの認識変化の面白さを高校生、大学生は知らないとすれば、それを経験する場を設けるのが大学でのブッククラブということになる。

ブッククラブでは様々なジャンルの本を読み、様々な職種の方々と話し合うので、ブッククラブに通い始める前と比べて、生活の中でのものの捉え方が変化しました。例えば、栄養、記憶力、メディア、対人関係、仕事、自然、本の読み方など、様々なものに対しての捉え方が変わったと思います。また、課題となる本が、



本質を突いたとても素晴らしい本ばかりなので、より深い捉え方も出来るようになっていく気がします。

ブッククラブの経験によって得たものは他にもいろいろとありますが、これらが大きなものです。(H. M.)

2006年度卒業生のH. M.さんは、ブッククラブに没頭してくれた一人である。彼は就職した今、何か大きな問いと向き合っているようである。ライプリーのように、本が「自分をつくる底荷」になる。出会った本についての多様な議論から、「深く考える」旅路を歩き始めた青年の姿がある。

### 3. 鍵を握る「選書」

#### 3-1 選書規準をめぐる

「本(作品)＝触媒」となるためには、どのような作品を選ぶか、つまり、「選書」が鍵を握る。初等中等学校における「国語」のカリキュラムには、洋の東西を問わず、読書リストが掲げられている。なかでも注目したいのは、学年ごとの膨大な読書リストを時間をかけて作成している、アメリカマサチューセッツ州ブルックライン市学校群である。選書規準が明確であり、「楽しい、おもしろい (enjoyable)」かつ「深く考えさせるような (thoughtful)、チャレンジングな」としている<sup>13</sup>。「楽しい」だけでなく、チャレンジングな内容が「触媒」になると考えられているのである。

前出のアップルマンの、アップルマン方式「朝食ブッククラブ」成功の要因の一つにも、選書規準の明確さがある。選書規準として次の諸点が挙げられている。(Appleman 2006 : 18-21)

1. 最近の作品を選ぶ。
2. 単におもしろいというのではなく、読書の喜びを味わえるような作品を選ぶ。
3. 皆で話し合ってみたい作品を選ぶ。議論する価値のある内容を含んでいる。
4. 子どもたちを大人の世界へとつなぐような作品を選ぶ。10歳代でも大人でも選ぶ本を選択する。「若者向け」とされている本は避ける。
5. より文化的な関心を広げるような「意外性」のある作品を選ぶ。生徒たちが、「larger conversation (視野の広がり)」を実感するような本を選ぶ。
6. 選書の理由を、読者たちに明らかにする。
7. 男性、女性ともが興味を持つ作品を選ぶ。
8. ペーパーバックで読める作品を選ぶ。
9. ノンフィクションの作品をいくつか選ぶ。

10. グループが持っているさまざまなレベルの読む力を多様化するような本を選ぶ。
11. 選書を参加者に手伝ってもらう。
12. 若い人たちの、感受性ではなく読む力の範囲を押し上げる本を選ぶ。(暴力的な内容、性的な内容、オカルトに類するものは避ける。)

言論の自由が保障されているアメリカにおいて、教育活動としてのブッククラブがこのような厳密な選書規準を持つ事実には、日本のブッククラブ関係者は、驚くであろう。実際、この選書規準を満たした作品群およそ 100 冊がアップルマンの同書に掲載されている。

アップルマンの考えは明確である。「高校生が、もしこのブッククラブがなかったなら読むことはないであろう、世に中の仕組みを知ること」である。

選書候補作品のなかには、製造業のような認知度の低い業界を描いた作品も選書されている。アメリカはスーパーマーケットの国と呼ばれるほど、スーパーマーケットは国民生活に浸透しており、就職先としてのスーパーマーケットは人気の高い業種である。男子高校生たちがブッククラブに参加するようになる背景には、このような社会派、硬派の作品が意図的に加えられていることも一因であろう。

世の中の仕組みといっても、高校生たちに根本的な疑念を抱かせるような内容は避けられるようである。青少年対象のブッククラブであるから、「暴力を題材とした作品、性的な内容」が選書から外れるのは当然ではある。アップルマンの同書にある選書リストの一冊、アメリカの低賃金労働の実態を詳細に書いたノンフィクション *Nickel and Dimed* だが、のちに東部のある州の学校で使う教材としてはふさわしくないと結論が出された<sup>14</sup>。

同書は、一流の経済系の出版社から日本語訳も出ている。著名な経済ジャーナリストが某スーパーマーケットで経験した労働実態が、詳細に描かれている。「社会派」と呼ばれる硬派の作品を、高校生対象のブッククラブ、ひいては大学生対象のブッククラブで選書すべきか、という問いが残る。

前出の小説家ライブリィは、自身の子ども時代にブッククラブ（グループ）がなかったことが残念だと述べるほど、ブッククラブに意味を見出している。ブッククラブとは、社会的・知的機能を持ったすばらしい考え方だとするのである。

同じような志を持った人々と時を過ごし、もし、ブッククラブがなかったならば、読むことができなかったであろう作品を読むと、チャレンジや自己弁護に向かう。

ブッククラブで本を読む目的は経験の幅を広げることであり、現状の心の枠を越えて、他人の視点からものごとを見ることである。(Lively 2013 : 179)

ライブリィは、ブッククラブの選書規準を分類してはいない。しかし、例えば次のように述べる。

私自身の心の監獄を出たい。他人のプリズムを通して、自分の心の監獄を出てみたい。常識的見方と小説が持つ多様さとの不一致は、つねに驚きを与えてくれる。  
(Lively 2013 : 170)

ライブリィのいくつかの言及から、その選書観を整理してみる。

1. ブッククラブがなかったならば、読むことがなかったであろう作品 → 我念にとらわれた常識的な見方を越えた多様さを持つ作品
2. さまざまな人のさまざまな見方・視点が出てくる作品（多様な見方を知る。）
3. 自分のそれまでの心の旧弊さや生き方を問う、壊す、Who I am. を迫る作品（自己否定とチャレンジ）

選書観・選書規準について共通することが見出せる。「ブッククラブがなかったら読まなかった作品」であり、楽しいだけでなく、「異分野」を含み「深く考えさせるような」「意外性」「チャレンジ性」に満ちた、「心の旧弊」を開け、「心の底荷」への扉を開く「触媒」となる作品を選ぶということである。

### 3-2 「選書」は失敗から学ぶ

「ブッククラブの成否の鍵は選書にあり」と最初からにらんでいたこともあって、ブッククラブを開催する際も選書には慎重を心がけている。アップルマンの実践から学んだことを踏まえ、大学生の多くは、人生において、認識変化が深いレベルで起こる時期なのではないかと考え、選書にあたっている。

認識の変化は、「意外性」が引き起こすことが知られている。この理論は、前出のデニー・ウルフが得意とする。

「意外性」を軸に選書してきたが、結果的に、邦訳のあるノンフィクションが多く選出されてきた。『錯覚の科学』（クリストファー・チャプリス、ダニエル・シモンズ）、『笑いと治癒力』（ノーマン・カズンズ）、『図書館ねこデューイ』（ヴィッキー・マイロン）、『モリー先生との火曜日』（ミッチ・アルボム）などである。

上記のなかで、『図書館ねこデューイ』に関しては、選書として成功したとは言えない。30代以降の特に女性たちのブッククラブ<sup>15</sup>では充実した話し合いが持たれるのであるが、学生たちのブッククラブではそうではないのである。心の底荷（ballast）に当たるものが模索できるほどに、学生たちの人生経験は曲折を経っていないからであろうか。さまざまな曲がり角に突き当たる同書の主人公の女性に、自分を照らし合わせて考えるという道を、30代以降の女性たちのようにはたどれない。

この作品は、工学院大学ブッククラブが初めて、八王子市民を対象として対外向けに「八

王子ブッククラブ」(平成27年、八王子市教育委員会後援)を企画・主催した会でも選書している<sup>16</sup>。年代層としては多様であったが、高齢の男性にとっては、同書の女性主人公の壮絶な人生に自分を置いてみるという深い読みには至らないようであった。

選書のなかには、海外文学も登場した。ディケンズ『クリスマス・キャロル』、ケストナー『飛ぶ教室』、カフカ『変身』などである。

『飛ぶ教室』については、「八王子 子どもと大人のブッククラブ」(平成26年)<sup>17</sup>で選書した。この会には、八王子市立檜原小学校のPTAの皆さんが参加してくださった。『飛ぶ教室』が、自身の「心の底荷(ballast)」となった方がいらした。ご自身でも驚くほどの「触媒」となったようである。当時小学5年生の息子さんが『飛ぶ教室』読破にチャレンジし、親子間でブックトークができたというエピソードもある。

『変身』については、名作でもあり、コンパクトな文章量の作品でもあるので読んでみようということになった。前出のJ. Y. さん(80代男性)は、この作品にのみ、ある種の拒否感を抱かれた。「この作品だけは、暗すぎて、どうしても読めない。若い人たちにアドヴァイスすることができない」という趣旨のことを考えられ、この回については、この理由のために欠席されたのである。

『変身』については、選書としては失敗ではない。しかし、人によっては、受け付けない作品というものもあることがわかる。多くの参加者にとって、より、触媒性のある作品を選ぶことは難しいが、それだけに、選書の経験から、良い選書への眼が養われていくに違いない。

## 4. 「問い」の質をめぐる複雑な背景

### 4-1 ブッククラブ用の「深い問い」

筆者が大学生に限定したブッククラブを思いついたのには、さらに深い背景がある。かつて、中学生が「子ども時代の終わり、大人時代の始まり」と評せられたが、今や、大学時代が、少なくとも、文化または思考活動における「大人時代の始まり」と言えるのではないか。

高校時代にまで及ぶ「仮面発言」が、いきなり大学生になって自由度を与えられたとはいえ、高校時代の修正が抜け切っていないので、大学生の発言は、高校文化が新しい自由度の高い「発言文化」に移行するまでの、いわば浅瀬に滞留しているような感じがある<sup>18</sup>。

発言における自由度の問題は、ブッククラブに限らず、思考活動、心のあり方、さらには、自分にとっての文化のあり方にまで及ぶ、大変に射程の長いテーマである。しかし、読

読書推進のまち、八王子  
待望のブッククラブ開催

参加者  
募集中!

## 八王子ブッククラブ

同じ本を読み合うことは、楽しい!



選書図書  
『読書推進のまち、八王子』(ディケンズ『クリスマス・キャロル』、ケストナー『飛ぶ教室』、カフカ『変身』)

対象：中学生以上で読書活動に興味のある方  
【日時と会場】 11月21日(土) 14時～16時  
八王子市学芸館都市センター 第1セミナー室  
(京八王子駅北口 東急スクエア2階)

参加費：無料  
主催：工学院大学ブッククラブ  
後援：八王子市教育委員会

【お申し込み先】  
お申し込みの方のお名前とお電話番号を  
記入のうえ、工学院大学ブッククラブ  
kougaku@bookclub.jpまで、  
Eメールでお送りください。

工学院大学ブッククラブ主催  
「八王子ブッククラブ」のチラシ

書文化があるようでない日本人の読書活動においては、「質の高い問い」が、読書人を支える大手出版社やおびただしい数の地元的なブッククラブによって育成されてこなかった。特に大学生対象のブッククラブにおいては、将来の読書人である大学生は、従来のような採点者向けの発言とは異次元の「深い発言」を促されたいのだが、日本の読書活動ではそのための「質の高い問い」の開発がなされてこなかったのである。

キーワードは、「深い問い」「深い発言」である。そのことを促すに際して欧米の大手出版社がブッククラブ用に用意する「ブッククラブのための問い」は、日本のリテラシー研究者やブッククラブ研究者たちにもあまり知られていないようであるが、問いの質を考えるには参照されるべきであろう。そのような、出版社が用意した（と言っても、作家自身がアドヴァイスしているようであるが）深い問いの実例には、人間の生き方の本質を問うようなものが多い。

日本の読書文化において「質の高い問い」が育まれにくいいくつかの要因のうちの一つには、間違いなく、「無宗教」ということがある（もちろん、筆者は本稿において、ブッククラブと宗教的な志向性を論じるつもりはない）。宗教のあり方と関連づけできないまま、「深い問い」の要件を考えざるを得ないという制約がどうしてもつきまとう。

「深い問い」の条件はいったい何であろうか。文学作品を扱う際に避けられないのは、人間の罪、許し、意味の構築などであろう。しかし、これらの要素が含まれる本（作品）であるかは、小説家の力量による。誰でもがそのような小説家になれるわけではないであろう。そのような人生経験と観察眼をもった作品は、読む側の敷居を高くしている。しかし、この敷居の高さは、同時に魅力でもある。深い読後感をもたらすのは、このような深さでもある。

カナダの作家ルイス・ペニィ（Louise Penny）の作風は、悔恨、呵責などが、長い時を経て本人を苦しめるプロセスが丁寧に解きほぐされていくものである。次の「問い」は、ペニィの、アルコール依存症をテーマに患者が周囲の人々に被害を与えるプロセスを描いた物語のために出版社が用意した、本の巻末に列挙された9つのディスカッション用の問いの一つである<sup>19</sup>。

この主人公は「許し」の意義を信じているが、罰を経たときにのみ「許し」が起るべきである、という考えを、あなたはどのように思いますか。

ブッククラブにおける問いの質について、「浅い vs 深い」という対立軸も検討すべきであろう。工学院大学ブッククラブでも、現況では、選書についての「問い」の開発が明確になっていない。雑談なら、どこでもできる。雑談にならずに、“本音”を引き出すために、「質の高い問い」の開発が課題である。



#### 4-2 vital path「生命の通り道」という隠れた「問い」

ブッククラブ、特に大学生対象のそれにおいては、perception change（内面変化、認識変化）が訪れることが期待される。認識変化が読書活動とどのように関わるかについては、アメリカのリテラシー研究者、メアリアン・ウルフ（Maryanne Wolf）に詳しい。例えば、アメリカの児童文学の古典『シャーロットのおくりもの』（E. B. ホワイト）のなかで、読者が経験する認識変化が次のように分析されている<sup>20</sup>。

『シャーロットのおくりもの』は、くものシャーロットが、農場の友だち、ブタのウィルバーが人間のエサになる危機を自ら編む糸による文字（言葉）で助ける奇跡の物語である。

このシャーロットの手助けの裏に隠されている見事な機転を子どもたちが読み取れるようになるのはなぜか？ 読字発達のこの段階は、幼い子どもが文中で語られていることと語られていないことが織りなす微妙な綾のなかから予測する術を学ぶ時期なのだ。子どもたちが初めて「与えられた情報を踏み越える」瞬間だ。突き詰めて言えば、文字を読む脳にもっとも重要な貢献を果たすもの——考える時間がここに始まるのである。（メアリアン・ウルフ 2008：200-201）

メアリアン・ウルフは、認識変化の根底に、考えること、「思考」の役割を、未知のものと既知のものの接続に見出している。

この作品を初めて読む子どもたちは、おそらくブタを飼ったことも、夜明けにくもの糸が輝くことも見たことはないであろう。しかし、子どもたちのなかには、ほかの経験や体験がすでに蓄積している。

筆者が実話として聞いた例を挙げよう。ある子の母親が、隣家の人から「上手にやけたから、食べてね」とクッキーのプレゼントをもらった。後日、もらった母親は「とてもおいしかったわ」と隣人に答えたが、脇にいたその子は「おかあさん、あのクッキー、ゴミ箱に捨てたじゃない」と言った。

修復できない話のほころびに翻弄されるこのような無邪気な経験こそが、その子が、語られない“綾”を知っていく1つ1つになる。

このような読書観の根底には、現代の脳科学で得られた所見が関わっている。本稿は読書論、リテラシー論と脳科学の関係を明らかにするところまでは言及できないが、一つだけ、重要点を指摘しておきたい。

それは、メアリアン・ウルフも指摘しているように<sup>21</sup>、人間の読書活動が人工知能による情報の記憶作業と決定的に異なるのは、いわゆる vital path（これについては適切な日本語訳がない。本稿では「生命の通り道」とする）の存在である。喩えて言えば、人間の内面を構成している悔恨の情、しこり、禍根、後悔、贖罪、罪の意識などの複雑な混成である。人工知能にはこのような「生命の通り道（vital path）」が存在しない。ゆえに、最悪の場合に



は、人工知能を搭載した武器がどのようなことにも使われた場合の危険性を内包している。

人間が人間であることの最後のよりどころが、「生命の通り道 (vital path)」なのである。これを経ない思考や感性は、人工知能による思考や感性と大差はない。読書において、メアリアン・ウルフが名作『シャーロットのおくりもの』や『ミドルマーチ』(ジョージ・エリオット)を引き合いに出して伝えようとしている点は、さまざまな人間的な思いを内包する「生命の通り道 (vital path)」のあり方なのである。

## 5. vital path (生命の通り道) をめぐる問題

### 5-1 可塑性

前節で言及した、読書論、広く言語認識論における「生命の通り道 (vital path)」の問題は、日本の認識心理学の世界でも明確な方向性が出ていない。

大学生対象の読書指導については、アメリカにおいても、哲学、言語学、歴史など人文系の学問領域を踏まえたうえで、生物学、進化論、脳科学から把握しようとしている。興味深いことに、進化論や脳科学の本に、アメリカの哲学者ジョン・デューイやウィリアム・ジェームズの1920年代の著作などが言及されている。読書論がコミュニケーション論と乗り入れる結果として、人間には「可塑性」があるという点が注目されてきた。

「可塑性」こそは、現代の進化論の最先端の概念である。読書のあり方を多方面から分析してきたアメリカのリテラシージャーナリスト、ニコラス・カー (Nicholas Carr) の著書 *The Shallows* (『浅い人々』)<sup>22</sup> によると、「可塑性によって、人類の脳と心は進化を遂げてきたのであり、人間性の本質は『可塑』にある。」すなわち、「外側内側からの強いインパクト的経験をいったん心のなかで咀嚼し、その結果を、まるで、粘土作品を作るかのごとくに自らの力と創意で形成するというプロセスが、人間の進歩をもたらした」という考え方である。(Carr : 2010 : 31-32)

作家のマイケル・グリーンバーグ (Michael Greenberg) は、「可塑性」と「執筆作品」を結びつけて論じた長編エッセイのなかで、「人間が持つ『可塑性』」は、人生で出会うさまざまな恣意的外傷、悔恨、自責などのメンタルなプロセスが起こる際に、その「周辺 (ephemeral) で起こるプロセスである」としている<sup>23</sup>。グリーンバーグは、作家の心において同種のプロセスが起こっているときに優れた作品が生み出されるのは、まさに「可塑性」によるという点を指摘する。

ニコラス・カーは、同書の *The Vital Paths* という章で、多くの事例を基に「生命の通り道 (vital path)」という不思議な現象が、人間が遭遇する「うつ」や強度の依存症の症状をどのように回避しようとするのか、また最悪の場合、症状を自己補強するのか、を明らかにしている。「可塑性」は、良い意味と悪い意味を共に持つ。

## 5-2 vital path (生命の通り道) を志向して

現代の脳科学における「可塑性」の問題を、大学生対象のブッククラブと関連させて分析してみたい。学生たちに、深いレベルで人間の高貴な面を示すとされる「可塑性」を経験してもらうには、選書される著作が、何らかの意味で、自責、呵責、禍根、後悔などの常識的には後ろ向きな内容と関わっているほうが良い、ということになる。

この点については、筆者自身の実践の積み重ねが不足しているが、現時点でわかっているのは、世の中に流通する「プラス思考」的なノウハウ本には弊害があるということである。それらの多くは「生命の通り道 (vital path)」を迂回している。世の中を単純化し、架空世界を口当たりよく描いた「プラス思考」については、その起源と仕組みについて説明されていかななくてはならず、「生命の通り道 (vital path)」との対比でそれを位置づけようとしている筆者にも、その任があるだろう。しかし、カーの著書から脳科学を学んだ現段階で言えることはある。「プラス思考」的なノウハウ本は、ノウハウであるがゆえに、複雑な「生命の通り道 (vital path)」を省略するということである。得られるのは一時の納得と、すぐに訪れる空虚感である。

したがって、選書においても、「生命の通り道 (vital path)」を迂回するような作品は、避けるという方針でよいだろうと考えている。「生命の通り道 (vital path)」を創造するため、読むことだけでなく、書くことについての企画も始めた。「工学院大学ブックエッセイコンテスト」がそれである。「これまでに、良い出会いとなった本」についてのエッセイを募集し、応募者全員で読み合うという合評審査会という方法で、「大賞」と「優秀賞」を一篇ずつ選出させてもらった<sup>24</sup>。

言い古されてきたことだが、人間の脳は使わないと錆びる。文字どおり、vital path が、生命の通り道なのである。現代の脳科学が、進化論的な色彩をも持つ「可塑性」に着眼することは、これからの読書論の形成においても影響を及ぼすであろう。

ニコラス・カーによると、本を「深く考える」「深く読む」ことは、詩人ジョージ・エリオットが言う“静かな地点”へと読者を置き換えていく。大学生対象のブッククラブにおいて「可塑性」が果たす役目を、筆者は、現時点でおぼろげながら把握している。現在の工学院大学ブッククラブ代表 N.O. さんが、期しくも、「可塑性」について語っている文章を引用して、本稿の結びとしたい。

私がブッククラブでいつも感じているのは、視野の広がる感覚です。自分ひとり

第1回  
工学院大学  
ブックエッセイ  
コンテスト

作品  
募集中!

あなたの  
1冊の本との  
出会い、想いを  
語ってください

あなたは今まで読んだ中で最も良い出会いがあった1冊の本について、自由な題による800字のエッセイ(未発表の作品)を募集します。  
応募者による合評によって審査を行います。

【応募資格】 本学の学生、大学院生、教職員 (なるべく合評審査会に出席できる方)  
【応募方法】 工学院大学ブッククラブのメールアドレスにお問い合わせください。振り出し、応募期限をお送りします。  
なお、応募期限は大学の新聞部、八王子図書館でも配布しています。  
【応募締切】 2017年3月31日(金)  
【合評審査会】 2017年4月6日(木) 会場：八王子図書館  
【賞】 グランプリ 準グランプリ 惜賞員

主催 工学院大学ブッククラブ  
【応募要項】 申し込み・お問い合わせ  
工学院大学ブッククラブ bookclub@iwate.ac.jp  
bookclub@iwate.ac.jp  
【応募要項】 申し込み・お問い合わせ  
工学院大学ブッククラブ bookclub@iwate.ac.jp  
bookclub@iwate.ac.jp  
【応募要項】 申し込み・お問い合わせ  
工学院大学ブッククラブ bookclub@iwate.ac.jp  
bookclub@iwate.ac.jp

「第1回工学院大学ブックエッセイコンテスト」募集のポスター

では気づかないような本の捉え方を聞くことができるので、自身の中に新しい考え方が生まれると感じます。また、自身の捉え方を話すと、それに対する意見や、それを聞いたことで捉え方が変わったと言う人もおり、ブッククラブに参加している全員に何か変化が起きているのではないかと考えています。いわゆる集団的知性が発揮される場なのかもしれないと思います。(N.O.)

## 注・引用文献

- 1 小田玲子「一冊の本を読み、本音をぶつけ合う ブッククラブ」吉田和夫・稲盛達也編、小中学校読書活動研究会著『これならできる！楽しい読書活動：アニメーション、ビブリオバトル、ブックトークなど気軽に実践するための事例集』学事出版、2015年、pp.90-95。  
 なお、筆者は、ブッククラブに関連する学会発表を行っている。「ブッククラブ実践における選書の規準をめぐって」第124回 全国大学国語教育学会（筑波大会）2014年11月9日  
 雑誌『社会教育』（月刊、発行：一般財団法人日本青年館）の筆者の長期連載「社会教育を見る眼」（Part1：15回、Part2：100回、Part3：80回（2017年7月号時点、連載継続中））でも、読書やブッククラブに関して繰り返して論じている。
- 2 Deborah Appleman, *Reading for Themselves : How to Transform Adolescents into Lifelong Readers Through Out-of-Class Book Clubs*, Heinemann, 2006, p.12-13, 15, 20, 87.
- 3 日本の教育界が3年後に導入する予定の、大学資格者認定試験（現在のセンター試験は実質的に廃止）の記述試験の考え方が出てきている。受験者に従来のように仮面的な回答を求めるのではなく、受験者の個人的な経験やそれと関連させて自説を述べることが求められるようになるだろう。その際、採点者側に求められるのは、採点の客観性である。記述された個人的な経験などを客観的に採点できるのかという疑問が、日本の教育界に強い。
- 4 吐露される作文への閉塞感の一例は次である。「私は作文が苦手、そして、嫌いである。なぜなら、読む人によって評価が違うからである。作文や論文など、読み手によって評価が変わる。だから、もし、別の人に読んでもらっていたら、もっと良い点が付いたかもしれない。おかしいと思いませんか？特に、小学校のころの作文は、担任の先生しだいで点数が大きく異なる気がする。（後略）」小田玲子『大学作文ポートフォリオ——自分の考えを創る』アカデメイア・プレス、2012年、p.16.
- 5 社会学者のエリザベス・ロングが、アメリカテキサス州ヒューストンとハリス群の女性ブッククラブに対して標本調査（1991年頃）（6グループ48名）する際に質問した「宗教への属性」に関する項目では、「プロテスタント」が54パーセント、「ユダヤ教」が13パーセント、「カトリック」が13パーセント、1名が「異教徒」と記し、4名が「無宗教」と主張した（ユダヤ教徒の割合が高いのは、全員がユダヤ系であるグループの存在によって部分的に説明ができる）。（ロング2006：114）エリザベス・ロング（田口瑛子訳）『ブッククラブ：アメリカ女性と読書』京都大学図書館情報研究会（発行：社団法人日本図書館協会）2006年（Elizabeth Long, *Book Clubs: Women and the Uses of Reading in Everyday Life*, The University of Chicago Press, 2003.）  
 筆者自身もあるプロテスタントの教派の信者であるが、信者同士による聖書と教会出版物についてのディスカッションは、クローズドなものではあるが、読書グループ活動とともとらえることができる。
- 6 Rexford G. Brown, *Schools of Thought*, Jossey-Bass Publishers, 1991.
- 7 Dennie P. Wolf, Assessment as an episode of learning. In R. Bennett and W. Ward (Eds.), *Construction versus choice in cognitive measurement*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1991. デニー・ウルフの業績については、Mark F. Goldberg による“A Portrait of Dennie Palmer Wolf.” *Educational Leadership*, Volume 52, Number 2, October 1994, pp.56-58. に詳しい。
- 8 Deborah Appleman, *Reading for Themselves*.
- 9 エリザベス・ロング『ブッククラブ：アメリカ女性と読書』

- 10 エリザベス・ロング『ブッククラブ：アメリカ女性と読書』
- 11 Dennie P. Wolf, は実際、この名作で高校生たちはどのように自分の内見変化が起き、作品のどの部分がきっかけになったのか、どのように自分の内面を探していったのか、などのプロセスが書かれた記述答案を多く示している。
- 12 Penelope Lively, *Dancing Fish and Ammonites: A Memoir*, Viking, 2013.
- 13 小学校から高校3年生まで、学年ごとに学ぶ体系が冊子『学びの目標』として示されている。*Learning Expectations Grades 7&8*, Brookline Public Schools より、7、8年生の「国語」を参照した。
- 14 Stacy Teicher Khadaroo, Why New Hampshire lets parents have broad say over children's coursework, *The Christian Science Monitor Weekly*, January 30, 2012
- 15 筆者が地元杉並で行っていた「アカデメイア・ブッククラブ研究会」が、平成26年度に「子どもゆめ基金」から助成を受け催したブッククラブでは、『図書館ねこデューイ』を選書した。30代以上の女性たちが組んだグループでの議論の活発さは、他のグループを圧倒するものがあった。
- 16 この会は、八王子生涯学習コーディネーター会の皆さんに応援していただいた。
- 17 平成26年度に「子どもゆめ基金」から助成を受けたが、大学サークルとしては助成金は授受できないため、主催者は「アカデメイア・ブッククラブ研究会」とし、「工学院大学ブッククラブ」は共催者であった。
- 18 試みに、読者に、現在の大学入試現代文の出題と模範解答を見ることを勧めたい。採点者の心象のみを意識した答案の数々を見ると、そのような訓練を少なくとも高校3年間訓練されてきた人たちの心象背景がどのようなものであるかは、高校で現代文を教える立場にない一般の読者でも察しがつくであろう。
- 19 Louise Penny 著、*The Long Way Home* (Minotaur Books, 2014) の版元（出版社）による「ディスカッションのための問い」は、ジャンルとしては、特に小説に付されているようである。
- 20 メアリアン・ウルフ（小松淳子訳）『プルーストとイカ：読書は脳をどのように変えるのか？』インターシフト、2008年（Maryanne Wolf, *Proust and The Squid: The Story and Science of The Reading Brain*, 2007）。同書は、小学生から大人までの読書人の体験における認識変化のプロセスと多様性への洞察に満ちている。
- 21 メアリアン・ウルフは、用語としては vital path を使用していない。第5節で言及するニコラス・カー（Nicholas Carr）が使っている用語 vital path と同種のことについて、メアリアン・ウルフも指摘している。
- 22 Nicholas Carr, *The Shallows : What the Internet is Doing to Our Brains*, W. W. Norton, 2010. 工学院大学ブッククラブの毎月の会合においても、大学生の間での「可塑性」のプロセスは、時に、手にとるようにわかるときがある。別稿にあらためたい。
- 23 Michael Greenberg, *Beg, Borrow, Steal: A Writer's Life*, 2009 についての、2009年のニューヨークタイムズの見聞欄（New York Times Review of Books）の書評を参照した。
- 24 「第1回 工学院大学ブックエッセイコンテスト」に、工学院大学附属中学校3年生から多数の応募が寄せられた。初回から、思いがけない充実した取り組みとなった。

（おだ れいこ 本学非常勤講師）